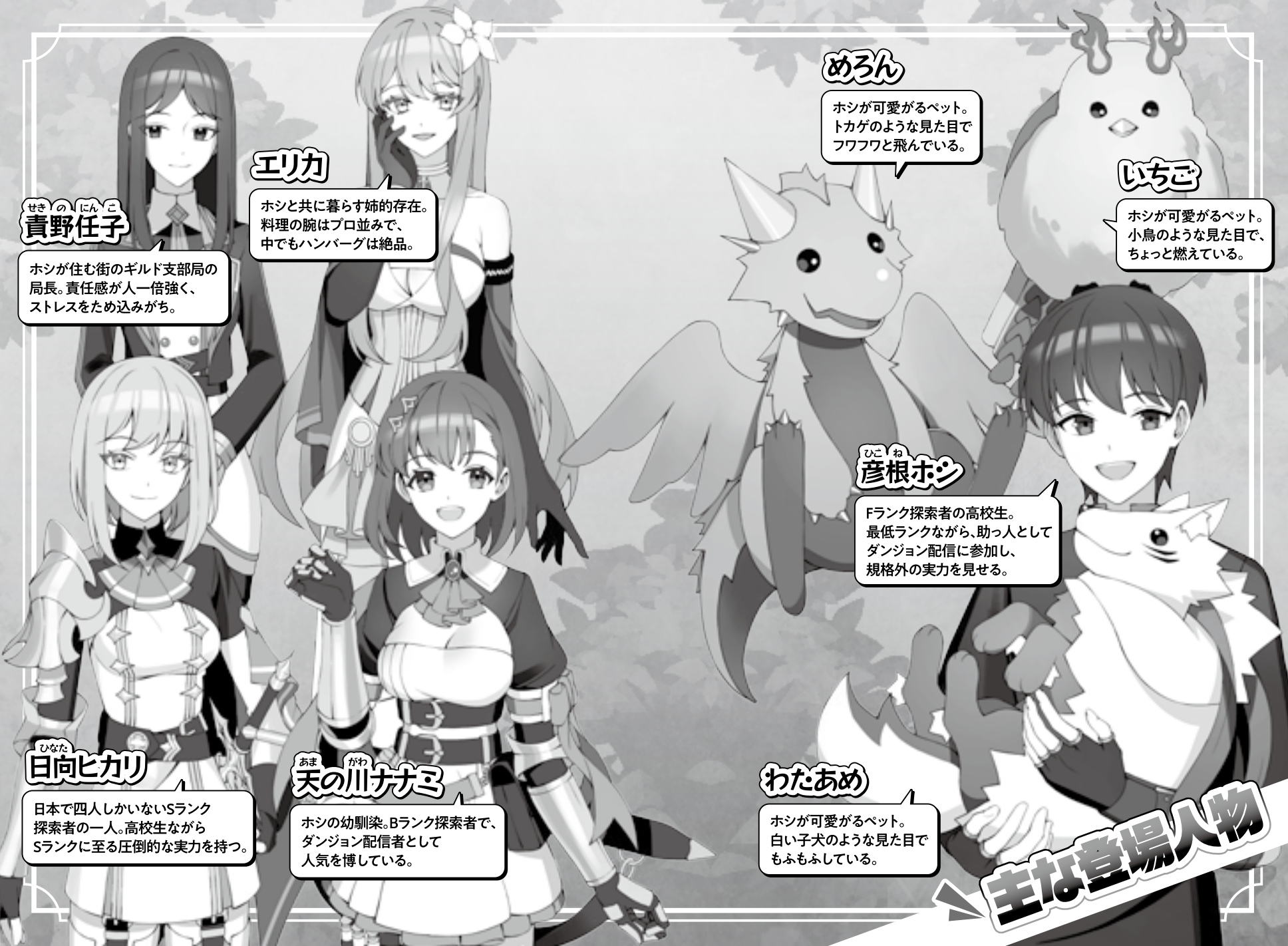
ただのFランク探索者さん、うっかりSランク魔物をぶっとばす

Frank tansakushasan, ukkari Srank mamono wo buttobasu.

規格外ダンジョンに住んでいるので、無自覚に最強でした

著
むらくも航

illust.
JYOTA


主な登場人物
責野任子（せきのにんこ）
ホシが住む街のギルド支部局の局長。責任感が人一倍強く、ストレスをため込みがち。
エリカ
ホシと共に暮らす姉的存在。料理の腕はプロ並みで、中でもハンバーグは絶品。
めろん
ホシが可愛がるペット。トカゲのような見た目でフワフワと飛んでいる。
いちご
ホシが可愛がるペット。小鳥のような見た目で、ちょっと燃えている。
彦根ホシ（ひこね）
Fランク探索者の高校生。最低ランクながら、助っ人としてダンジョン配信に参加し、規格外の実力を見せる。
日向ヒカリ（ひなた）
日本で四人しかいないSランク探索者の一人。高校生ながらSランクに至る圧倒的な実力を持つ。
天の川ナナミ（あまがわ）
ホシの幼馴染。Bランク探索者で、ダンジョン配信者として人気を博している。
わたあめ
ホシが可愛がるペット。白い子犬のような見た目でもふもふしている。

プロローグ　ただのFランク探索者

「へえ、それで配信をするんだね」
洞窟のような暗い場所の中、俺は浮遊する物体を見ながらつぶやく。
「そうよ！　浮遊型カメラって言うの！」
答えてくれたのは、隣にいる同い年の幼馴染、『天の川ナナミ』。
茶色のセミロングヘアに、クリンとした大きな瞳が特徴的な、元気な奴だ。ちょっと口は悪いけど、その分なんでも言い合える仲でもある。
「ていうかホシ、あんた探索者なのに知らないの？」
「そ、その辺には疎くて……」
「まったく。今時、誰でも知ってるわよ」
昔、突如として世界中に出現した『ダンジョン』。地上では考えられない生物である魔物や、お宝が存在する不思議な空間だが、それも今では日常の一部となった。そんなダンジョンに潜り、調査、採取、討伐を行う者を『探索者』と呼ぶ。
そこまでは常識だけど、最近では探索の様子を配信する『ダンジョン配信者』が現れて、新たな

娯楽として話題みたい。
そして、ナナミもそんなダンジョン配信者の一人だ。チャンネル登録者も多く、それなりに人気者らしい。だけど、ナナミが残念そうにつぶやいた。
「……はあ、人選間違えたかも」
「失礼だなあ」
俺――『彦根ホシ』は、ナナミとは違う高校に通っている。最近は軽い連絡しかしていなかったけど、三日ほど前に急にお誘いがあった。
暇だったし了承したら、こうしてダンジョン配信の助っ人として駆り出されたわけだ。ナナミの言う通り、俺は一応探索者の資格は持っているから、何も問題はないけど。
「じゃ、そろそろ配信始めるわよ？」
手を一つ叩き気持ちを切り替えたのか、ナナミが少し大きな声で聞いてくる。
「りょーかい」
「よし！」
そうしてナナミは、カメラを操作して、配信を開始する。
「みんなこんばんは～！　天の川ナナミだよ！」
「!?」
ナナミは突然声を高くして、ハイテンションで話し始めた。俺は思わず、ギョッとした目を向けてしまう。

《こんばんは～！》
《こんナナー》
《待ってたよ！》

浮遊型カメラから、ホログラムの機能でコメントが映し出される。でも、その中にナナミの態度へのツッコミは一切無い。配信時はむしろこっちがスタンダードなのかも。
俺がそんなことを考える中、ナナミは続けた。
「今日は告知通り、助っ人を呼んだよ！　どうぞ！」
「……！　ど、どうも～、彦根ホシです」
ナナミにほらほらと促され、俺はお辞儀をしながら画角に入っていく。

《幼馴染のホシ君か》
《助っ人君よろしく～》
《ちょっとかわいい》
《緊張してる？ｗ》
《テンション低めなのかな？》

おお、さっそく俺に対してもコメントが。だけど、この場合は俺のテンションが低いんじゃなくて、むしろナナミが……

「何よ？」

「いや、急に声が高くなったなって……」

「配信だもん！　テンション上げてやるに決まってるでしょー！」

正直に答えると、ナナミは顔を赤くして叫んだ。どうやら言っちゃいけないことだったみたい。

《おいおいｗｗ》

《いきなりぶっこんでて草》

《ホシ君天然か？ｗ》

《これは幼馴染》

《コラボ不安だったけど面白くなってきたな》

「コホン。では気を取り直して。このホシと今日潜るのは、なんと最近できたばかりのダンジョンです！」

「え、そうなの？」

「そうよ。二週間前にできたんだって。一般開放も昨日されたばかりよ」

「聞いてないけど……」

《ホシ君に伝えてないの草》

《行き当たりばったりなの、素も配信と同じじゃねえーか》

《勢いだけで生きてる》

どうやらナナミの勢いだけの性格は配信でも変わらないらしい。

「で、ダンジョンのランクはいくつなの？」

俺は、とりあえず大事なことを聞いておく。

ダンジョンには難易度によって『ランク』が設定されている。ＳとＡ～Ｆの七段階で、最難関はＳランク。あとはＡから順に難易度は下がっていく。ランクは一般開放前に専門機関『ギルド』によって決められるとか。

俺の質問に、ナナミはニヤリとした顔で答えた。

「聞いて驚きなさい！　このダンジョンは、Ｂランクよ！」

「え？」

《はい？》

《おいおい大丈夫かよ》

《これは終わりです》

思わず高いと思ってしまった。コメント欄も同じ反応みたいだ。
だけど、ナナミはふふんと指を立てる。
「でも安心して！　上層ならFランク相当の魔物しか出ないらしいから！」
「なーんだ、そうなのか」
ダンジョンは上層、中層、下層と呼ばれる層に大きく分かれている。下に進むほど魔物は強くなり、難易度は上がっていくみたいだ。

《まあ浅い階層はレベル低いよね》
《Bランクとはいっても一番上はたかが知れてる》
《深く進まなければ大丈夫》

一瞬びっくりしたけど、視聴者はそういった仕組みを理解した上で、わざと反応していたみたい。それならちょっと安心。でも、やっぱり疑問は残る。
「なんでわざわざこんなところに？」
「もー！　話題作りのために決まってるでしょ！　行き慣れたとこよりは、新鮮味があっていいでしょ！」
「なるほどねえ。ダンジョン配信者も世知辛いねえ」

「それを言わなーい！」

《ぜーんぶ説明させて草》
《ホシ君、やっぱ天然よなあw》
《無知なだけかもw》

「ま、まあ？　このレベルなら助っ人なんていらないんだけどね！」
「え？　じゃあ帰っていい？」
「ダメダメダメ！」

《ナナミン暗いとこ苦手だからなあ》
《だから助っ人連れてきたのか》
《普段は草原のダンジョンとかばっか行ってるし》

コメント欄を見て、そういえばと思い出す。
昔からナナミは暗い所が苦手だったな。それでも、話題作りのためにこのダンジョンに行きたくて俺を誘ったと。ナナミなりに頑張ってるじゃないか。
そう感心していると、あるコメントが目に付く。

《ホシさんは探索者ランクいくつなんですか？》

ダンジョンのランクと同様、探索者にもギルドからランクが付けられる。俺は素直に答えた。

「俺はFランクですよ。ダンジョンは一つしか潜ったこと無いですし」

《え、まじ？》
《初心者中の初心者じゃん》
《Fランクって車の免許ぐらい取るの簡単だろ》
《ナナミンより下じゃん》
《おいおい、大丈夫か？》
《不安になってきた》
《護衛になってない》

途端にコメント欄に不安が広がる。正直に答えない方が良かったかな。でも、嘘をつくのもなあ……と、少し様子を窺っていると、ナナミが場を収めてくれる。

「はい、みんな安心して！　わたしがいるから！」

《さらに不安》
《安心要素ゼロ》
《こりゃあかんわ》

「こらー！　わたしをなんだと思ってるの！」

《ごめんごめん》
《冗談だよ》
《怒られちゃった》

「まったくも～」

これはもしかして、ナナミはコメントが自分に向くように庇ってくれたのか。場慣れしてるなあ。

「とにかく！　進んでいきますね～！」

そんなこんなで配信を開始した俺たちは、ダンジョン内を進んでいった。

◆

探索を進めることしばらく。

「はあッ！」
「おお～」
魔物はナナミが倒し、俺が後ろから拍手するという流れが続いていた。コメント欄も言っていた通り、上層は弱い魔物しか出てこないらしい。

《拍手係でわろた》
《ホシ君も戦えｗ》
《いやＦランクは無理せんでいい笑》
《ナナミちゃんが活躍してるからこれでいいよ》

コメント欄はずっとこんな感じ。俺は別に目立たなくてもいいし、ナナミが活躍してファンが喜んでいるなら、それがベストだと思う。
「さーて、次はこっちに行くわよ！」
ナナミの進行ルートは、あらかじめギルドからもらっていた地図に従っている。まだ開放されたばかりで、全てが判明しているとは限らないって話だったけど。まあ、これはナナミの配信だし、本人が決めるのがいいだろう。
――しかし、この判断がいけなかった。
「うーん。この辺はさらに暗くなって――ひゃあっ！」

「え!?」
ナナミが何かを踏んだのか、俺たちの周りがボウンと淡く光る。

《まずい！》
《転移型のトラップじゃないか!?》
《そこから離れて！》

「な、何よこれ!?」
「ナナミ！」
すぐにここを離れようとするも、ナナミの足が床から離れない。踏んだら最後ってことなのか!?
「「……！」」
そして、俺たちは明るさを増していく光に包まれた。
「……ん？」
周りの光が薄れていき、次第に周囲が見えてくる。すると、隣から息を呑む声が聞こえた。
「う、嘘……！」
ナナミの声だ。だけど、両手で口を覆い、全身を震わせている。
彼女が見上げる先には――巨大な魔物。
「ギャオオオオオオ!!」

目を惹く巨大な緑の翼。それをバサッと羽ばたかせながら、大きな翼竜がこちらを睨んでいた。

《ワイバーン⁉》
《トラップで下層に転移したのか⁉》
《ワイバーンってSランクの魔物じゃねえか！》
《まじかよ、Sランクって日本中探しても勝てる奴いるかどうかだぞ⁉》
《お願いだから逃げて‼》

「――ギャオオオオ‼」
「「……！」」
そして、二度目の大きな咆哮。
コメント欄の逃げてという叫びもかなわず、ワイバーンが振り回した尻尾がナナミを襲う。俺は咄嗟にナナミを押しのけ、代わりに尻尾の直撃を受けた。
……ん？
少しして、目を開く。耳を澄ますと、すぐ近くから鼻を啜る音と、か細い声が聞こえてきた。
「こんなはずじゃなかったのに。久しぶりに会って、今のわたしを見てほしかっただけなのに……」
ナナミはそんな風に思ってたのか。さっき「え、じゃあ帰っていい？」とか言って悪かったな。
「ごめんなさい、ホシ……」

《ホシ君ー‼》
《うそだろ……》
《さっきまであんな楽しそうだったのに》
《ナナミちゃんだけでも今すぐ逃げて！》

コメント欄もなぜか雰囲気が暗い。もしかして、死んだと思われてる？
「ギャオオオオオオ！」
「……！」
そんな時、ぺたんと座り込むナナミに向かって、ワイバーンが口を開けた。必殺技なのか、大きく開けた口には炎が集まっていく。
ナナミは目をつぶっているけど、避けないのか。
うーん、出番を奪ってしまうかもしれないけど、このままじゃ危ないし、一応防いでおくか！
「ていやー！」
――ドガアアアアアア！
攻撃を止めるだけのつもりが、思いの外吹っ飛ばしてしまい、壁に打ちつけられたワイバーンは悶えている。

《なんだ⁉》
《すげえ音したぞ⁉》
《どこからだ⁉》

「大丈夫？」
「……えっ」
呆然とするナナミに、俺は手を差し出す。ナナミは困惑したようにこちらを見上げる。
「ケガは無い？」
「……！」
すると、ナナミの頬に一筋の涙が流れた。

《ホシ君だあー‼》
《生きてたのか⁉》
《じゃあ今のドガアって音は……？》
《え、てかワイバーン倒れてね？》
《おい、まさか……》

今時のカメラは高性能で、残虐なシーンを予測して自動でモザイクがかかるらしい。今はそれが

解除されたのか、カメラのプレビュー画面に最高画質で俺が映っている。
それでも、視聴者もナナミ同様に困惑しているみたいだ。
「まさか、今のはホシがやったの？」
「え、うん」
「でも、ホシはFランクじゃ……！」
「そうだよ。それより大丈夫？　……撮れ高は」
声を上げるナナミに対して、俺は本当に心配なことを尋ねた。
「……はい？」

《何言ってんだこいつ》
《どういうこと？》

あれ、おかしいな。配信は撮れ高が何より重要って、ナナミが言っていたはず。
「あいつ、ナナミが倒すのかなーって。そこに俺が手を出しちゃったから」
「む、無理に決まってるでしょ⁉」
「そうなの？」
どうにも話が噛み合わない。すると、ナナミは目を見開いて窺うように聞いてきた。
「も、もしかして、倒せるの？」

「まあ倒せるだろうけど」
「本当に……？」
そう答えると、ナナミはギュッと手を掴んでくる。
「お、お願い！」
「おっけー。ナナミがそう言うなら！」

《ナナミちゃん正気か⁉》
《ホシ君はFランクだぞ⁉》
《もうFランクにも縋る思いなんだろ！》
《けど、なんか余裕があるような……？》

コメント欄も受け入れてくれたみたいだ。それなら、ちょっと張り切っちゃおうかな。
「自分ち以外のダンジョンは初めてだけどね！」
俺が跳ねながら出方を窺っていると、ワイバーンはすぐに尻尾を振り回してきた。
「ギャオオオオオオ！」
「それか！　ほっ！」
先ほどと同じ攻撃だ。さっきはナナミを庇って食らったけど、今回は食らわない。

《え、避けた⁉》
《てか消えた⁉》
《なんか身軽じゃね……？》

尻尾の振りが大きく、ワイバーンは体勢を崩している。これは大チャンス。俺は高く跳び上がった。
「おりゃあああああ！」
そしてそのまま、ダンジョンの壁を走り始める。
ダンジョン内は、特有の物質『魔素』が充満していて、それを利用することで地上ではありえない動きが可能となる。ダンジョン内で思い切り動くのはやっぱり気持ちいい。

《おい壁を走ってんぞ⁉》
《なんじゃそりゃ！》
《魔素込みで考えてもおかしいだろ！》
《意味わからん意味わからん！》
《え、これ合成じゃないよね？》

「ギャオオオオ！」

ワイバーンが飛翔して追いかけてくる。でも、やっぱり思った通りだ。
「あの子の方がよっぽど速いかな……ていや！」
「グギャアァァァ！」
俺は空中でワイバーンを蹴り、叩き落とす。あまり手応えが無いけど、なぜかナナミはその様子に目を奪われているみたいだ。
「どういう、こと……？」

《これ現実？》
《ホシ君めっちゃ笑ってるし》
《Ｆランクじゃないのか……？》
《一体何者なんだよ！》

「――ギャオオオオオオ!!」
すると、ワイバーンは怒ったように咆哮を上げ、また炎が口に集まっていく。
「まずいわ、『火球』よ！　逃げて！」
ナナミは下から必死に叫んでいる。でも、撮れ高を考えるなら――
「撃ってみれば？」
「ホシ!?」

「――ギャオオオオオオオオオオ!!」
今までで一番の咆哮と共に、ワイバーンは大きな『火球』を放つ。
「逃げてよーーー!!」
悲鳴にも似たナナミの声。そして、それをかき消すような轟音が辺りに響き渡った。『火球』が地面に衝突した音だ。
「うーん」
それでも、俺は『火球』を受け流しながらやっぱり思ってしまった。
「あの子に比べたら、ぬるいかも」
「ギャオッ!?」

《は？》
《正面から受けてノーダメージ……？》
《異次元過ぎて笑えてきたｗ》
《もう訳わからんｗｗｗ》
《ぶっ倒しちまえ！》

「撮れ高は十分かな」
コメント欄をチラ見してから、俺はダンジョンの地面を蹴る。

「とあー！」
「――ギャアアアアアア」
俺はその勢いのまま、ワイバーンの頭をぶん殴った。ワイバーンの長い首はグニャリと曲がり、地上へ崩れ落ちる。やがてその体はダンジョンへと取り込まれていき、跡形もなく消えた。
これは討伐の証だ。初めて見たけど。

《なんだその声ｗｗｗ》
《とあー（棒）》
《かっこよくなくて草》
《Ｓランクを倒すとか、まじで信じられない……》
《ガチで偉業クラスじゃないか……？》

危機が去り、コメント欄はここ一番に盛り上がっていた。いつの間にか、同時接続数は５０万人を突破している。安堵したのか、ナナミも全身の力が抜けたようにぺたんと座り込む。
「よ、良かった……」
でも、俺には疑問が残っていた。今のが最上位のＳランク魔物なのだろうか。
俺は思わず首を傾げながら、つい声を漏らしてしまった。
「うちのペットたちの方が強くないか？」

【天の川ナナミの配信について語るスレ　vol.16】

45：配信を見守る名無し ID:hF2nRu9C
お前ら、今日のナナミンの配信見たか

46：配信を見守る名無し ID:hA9tXw3Q
トラップにかかったやつだろ
さすがに衝撃映像だった

47：配信を見守る名無し ID:hL7pVz1K
〉〉45　なにそれ

48：配信を見守る名無し ID:hA9tXw3Q
知らないのか
今のトレンドを埋め尽くしてるぞ
これ見てこい
https://www.kysnrnndwvjc.com

49：配信を見守る名無し ID:hL7pVz1K
サンガツ
ちょっと見てくるわ

50：配信を見守る名無し ID:hX6KmYq0
ファッ！？

51：配信を見守る名無し ID:hT0WbZp8
これガチ映像か？？

52：配信を見守る名無し ID:hC5QrMo2
この「ホシ君」ってやつ何者？

53：配信を見守る名無し ID:hP3NyLv7
それが分からなくて話題になってんだよ

54：配信を見守る名無し ID:hM8XfWa1
配信中に探索者ランクはＦとか言ってた

55：配信を見守る名無し ID:hR1ZtKc4
〉〉54　え？　Ｆランク？？？

56：配信を見守る名無し ID:hN4LpYv6
車の仮免レベルだぞそれ

57：配信を見守る名無し ID:hY7FwQo3
嘘だろ……しかも若くね？

58：配信を見守る名無し ID:hG0XmBp5
天の川ナナミの幼馴染って言ってたし高校生っぽい

59：配信を見守る名無し ID:hW6CvLz9
いやいやどうせ合成やろこんなん

60：配信を見守る名無し ID:hU9TrKx2
こんなのに騙されるとかｗｗｗ
情弱乙ｗｗｗ

61：配信を見守る名無し ID:hK2MoWy8
〉〉60　どうやったら合成できんだよ教えてくれ

62：配信を見守る名無し ID:hJ5XpNc0
ナナミンはそんなことしないだろ

63：配信を見守る名無し ID:hE3ZqLv1
まあ、そんだけありえないってことだわな
俺もまだ半信半疑や

64：配信を見守る名無し ID:hB8YwMt4
本当はすっげー有名な探索者でしたー、とかじゃないん？

65：配信を見守る名無し ID:hD1RpKz6
もしそうだとしても、ワイバーンをソロ討伐は不可能

66：配信を見守る名無し ID:hZ7XoCv3
別ダンジョンのワイバーンに対しては、A ランク集団が撤退したぐらいだからな

67：配信を見守る名無し ID:hV9KmXq2
しかも手ぶらに装備無しだぞ

68：配信を見守る名無し ID:hT1ZpRo8
アホすぎてもはや笑えてきたｗｗｗ

69：配信を見守る名無し ID:hC7nWyLb
わかるｗｗ
俺もホシ君のファンになりそうだわ

70：配信を見守る名無し ID:hX4MoKv3
ちょくちょくクセになる部分あるわｗ
天然とか、微妙にかっこよくないところとか

71：配信を見守る名無し ID:hL6YzWp0
ホシ君配信始めてくれないかな

72：配信を見守る名無し ID:hB0RpXc5
始められないよ
合成だってバレるもん

73：配信を見守る名無し ID:hU2FtMq9
いーや、配信始めて伝説を作っていくと予想

74：配信を見守る名無し ID:hN8XqLb1
強くなった経緯とかも気になるよな

75：配信を見守る名無し ID:hF3ZyWo7
ダンジョンも一つしか潜ったことないって言ってたし

76：配信を見守る名無し ID:hW5LvKt6
気になりすぎるな

77：配信を見守る名無し ID:hR0XpNc4
他に高校生で S ランクって誰かいなかったっけ

78：配信を見守る名無し ID:hG1MoYv8
〉〉77　ヒカリちゃんだろ
あの子でも無理っぽいけど

79：配信を見守る名無し ID:hA6ZpXt2
じゃあまじで何者なんだ

80：配信を見守る名無し ID:hM7WqKo9
わからなすぎる……

☆
★
☆

その頃、とあるマンションの一室にて。
掲示板の書き込みが加速する中、画面を食い入るように見ている少女がいた。
「嘘でしょ。なんなのよ、これ……」
少女の名は、『日向ヒカリ』。
金色のショートカットヘアに、あどけなさを残す整った顔つき。身に着けているのは、可愛らしいリボンが特徴の制服だ。
ヒカリは、日本に四人しかいないSランク探索者の一人。また、その中で最年少の上、唯一の現役高校生である。
そんな彼女が、話題沸騰中のナナミの配信を確認していた。度肝を抜かれた表情で。
「こんなの、ありえない……」
ホシの驚愕映像はフェイク説すら出ている。だが、Sランクの肩書きを持つヒカリには、それがすぐに本当の映像だとわかった。
だからこそ信じられないのだ。それほどに、ホシの動きや拳の破壊力は計り知れないものだった。それも身一つという、あえてなのか、単純に何も考えていないだけなのか、判別できない規格外っぷりで……

そして、極めつけは最後にボソッと口に出した言葉だ。
『うちのペットたちの方が強くないか？』
「!?」
どんな些細な音も逃さないヒカリは、わずかにマイクが拾ったホシのつぶやきを聞き取っていた。
しかし、耳を疑っている。ワイバーンが討伐されたのすら初めてなのにもかかわらず、それを超す強さを持つ「何か」がいるというのだから。
そして、ヒカリは決意した。
「彦根ホシ。一度、接触してみる必要がありそうね」

第一章　伝説の始まり

「久しぶりだなあ」
俺はアパートの一室の前に立ちつぶやく。たった今呼び鈴を鳴らしたのは、ナナミんち。
「まったく。騒がしい奴だよ」
ナナミの助っ人配信を終えて、次の日の朝。
日曜日だからゴロゴロしていようと思ったのに、さっきいきなりナナミから通話があった。
『ホシ！　と、とにかく今すぐうちに集合！　いいわね！』
急にそんなことを言われて、やってきた。幼馴染とはいえ、山奥の俺んちからは結構かかるのに。
少し待っていると、勢いよく玄関が開いた。
「来たわねホシ！」
「あ、おはよう。今日はなんの用――」
「いいから早く入って！」
「うわっ！」
ナナミの前髪は上にはねていて、急いで支度したみたい。その慌ただしい格好のまま、ナナミは

いきなり俺を家の中に引っ張った。
「なんだよ～。あ、お邪魔しまーす」
「なんだよ～、じゃないわよ！　はい、そこ座る！」
一応あいさつをして、そのままナナミの部屋へ。なんで正座したんだ、俺。
「ったく、この状況でよく呑気でいられるわね！　これを見なさい！」
「んー？」
何やら焦るナナミにスマホを向けられ、俺は適当に画面を見る。
だけど、ナナミが画面をスクロールしていくにつれて、俺の目はどんどん釘付けになっていった。
そこには信じられない光景があったからだ。
「なんで俺の名前がたくさんネットに!?」
ナナミが見せてくれたのは『ツブヤイター』。ＳＮＳの一つだ。
そして驚くことに、そこには『彦根ホシ』、『謎の助っ人Ｆランク探索者』、『超新星ホシ』などの言葉がトレンドになっている。というか、トレンドを埋め尽くしている。
「ど、どういうこと!?」
「本当に何も知らないのね。今時ＳＮＳもやってないとか、相変わらず原始人じみてるわ」
続けて、ナナミはある動画を見せてくる。映っていたのは、ワイバーンと戦う少年……って。
「これ俺じゃん！」
「だから言ったでしょ。これが今拡散されて、とんでもないことになってるの！」

「そ、そうなんだ……あ、そういえば」
言われてみて思い当たることがあった。今日はここに来るまで、やけに人の視線を感じるなーって思ったんだ。もしかして、この件があったからなのか。
「それでナナミも、玄関で周りを気にしてたの？」
「そういうこと」
そこで一度会話が止まる。それと同時に、とんでもない不安が襲ってきた。
「……あれ、これってまずいんじゃ」
俺は思わずその場で項垂れた。
まさかこれが特定というやつなのか！　そういうのが怖くてＳＮＳをやっていなかったのに！
そんな気持ちが勝手に口から飛び出していく。
「ナナミ、助けてくれ！　俺は一体どうしたらいいんだ！」
「ちょ、ちょっと、落ち着きなさいってば！」
「あうっ」
ナナミにしがみついた俺は、すぐにひっぺがされる。
「典型的なＳＮＳへの不安と恐怖ね」
「昨日のワイバーンより全然怖い」
「今の言葉、配信してたらまたバズりそうだわ」
ナナミは呆れたような目で見てくる。それでも俺を見捨てないでいてくれた。

「よく聞いて。これは別に悪いことじゃないの」
「そ、そうなの？　晒されているわけではないの？」
「そうとも言えるけど……少なくとも、これは悪意ではなく賞賛されて注目を集めているのよ」
「えっ、そうなんだ！」
「単純か」
その言葉で急に安心したのがバレたらしい。
「でも……そうね。そこがウケるポイントよ」
「どういう意味？」
ナナミはニヤッと笑って言葉にした。
「ホシ、あんた配信をやりなさい！」
「ええーっ!?」
言われたのは、予想外の言葉だった。俺には無理に思えるけど、ナナミは「いける」と確信を持っているみたい。
「ホシ、昨日のワイバーンはどうだったかしら」
「え、強くはなかったけど」
「ほら。もう面白い」
「どこがだよー！」
ナナミの口角が吊り上がる。世間ではこれがウケるのかな。

「それにあんた、バイト探してるんでしょ？」
「あ、うん。そうなんだよね」
俺の家は山奥にあり、高校に通うのすらそれなりの時間がかかる。その上、市街地でバイトをするとなると、さすがにハード過ぎるので、最近ナナミに軽く相談していたんだ。
「だったら、配信はまさにぴったりだわ」
「配信がー？　言ってもそんなにお金にならないでしょ？」
「あんた、ダンジョン配信をナメてるわね」
「じゃあ、ナナミはどれぐらい稼いでるんだよ？」
やれやれといった様子のナナミに、俺は期待せずに聞いてみた。対して、ナナミはニヤッとした顔で言い放つ。
どうせしょぼ――と思ったのが俺の過ち（あやま）だった。
「こんぐらいよ」
「なんだってー!?」
ナナミが指で表した数字は、俺の想像を遥かに超えていた。さらに、ナナミはここぞとばかりに手の形を変え畳み掛けてくる。
「先月は……たしかこれだけよ」
「うっそお！」
「どうよ。驚いたかしら」

「あ……あぅあ」
これは決まりだ。
「ハイシン、ヤル」
「単純で助かるわぁ。じゃあ、それ開けて」
ちょろいなぁと言われながら、ナナミが指したダンボール箱の中を、俺はガサゴソと探った。そこから出てきたのは、カメラやマイクといった、配信機材一式だ。
「うわぁすごい！　これどうしたの？」
「わたしのお古よ。全然使えるから、ホシにあげる」
「ええ！　これを全部!?」
でもさすがに、はいどうもとは受け取れない。
「どうせもう使わないからいいわよ」
「けど、だからって……」
そうして戸惑（とまど）っていると、ナナミはみるみるうちに顔を赤くさせて言った。
「もー！　わたしがしたいの！」
「え？」
「またいずれ、あんたと配信したいの！　配信者になったあんたと！　乙女に全部言わせんじゃないわよ！」
すると、さっきまで合っていた目線がまるで合わない。ナナミが逸らしているからだ。

「それでいずれ、またわたしとコラボする！　これでチャラよ！」
「……！　わ、わかった。ありがとう」
それから最後にチラッと合った視線は、なんだかいつものナナミとは違って見えた。
「じゃ、色々と教えるから！　あんた機械音痴だしね！」
「よ、よろしくお願いします……」
かと思えば、ナナミはいつものようにパッと明るくなる。よくわからない奴だ。
その後、ナナミに配信について手取り足取り教えてもらった。

◆

ナナミんちから帰宅して、夕方。
「こ、これでいいんだよな」
俺は自宅で浮遊型カメラの前に立っている。ナナミから『鉄は熱いうちに打て！』と言われたので、早速配信を開始しようとしているところだ。
「うわあ、緊張してきた……」
スマホには、ナナミから『がんばー☆』とのメッセージが。よし、頑張ってみるか。
「配信開始！」
習った通りに操作し、俺はいよいよ配信を開始する。すると、浮遊型カメラからコメントが一気に映し出された。

《きたあああ！》
《うおおおお！》
《本物のホシ君だ！》
《昨日のワイバーン討伐見ました！》
《楽しみに待ってました！》

「うえっ⁉」
一気に流れるコメントと共に、隣の数字に目が行く。
『５０００人が視聴中』
ナナミを手伝っている時は気にしていなかったけど、これってリアルタイムでこれだけの人が見てくれているってことだよな？　それってすごくない？
「皆さん一体どこから……？」
《ナナミちゃんから》
《ナナミンが告知してたよ～》

そういうことか。ちょっと人が多すぎて緊張するけど、ナナミには感謝しないとな。
「で、では、早速配信を始めていきたいと思います」
そう言ったものの一歩が出ない。しまった、緊張しすぎて肝心な配信内容を考えていなかった！
――なんて思った時。
「キュイ～！」
家の奥から、可愛い声が聞こえてくる。俺はすぐさま振り向くと、ソレを両手を広げて迎えた。
「お！　めろん！」
「キュイー！」
飛んできたのは『めろん』。うちで飼っているペットのうちの一匹だ。
明るい黄緑の毛並みで覆われた、もふもふの全身。両手で包み込めるサイズ。背中からは、ぴょこんと小さな羽根が生えている。
めろんは、俺が幼い頃から家にいるトカゲのようなペットだ。なんか空飛んでるし毛も生えてるから、たぶん違うんだろうけど。
名前の由来は、体の色が果物のメロンに似ているからだ。
「どうしたんだーめろん。何をしてるか気になったのか？」
「キュイッ！」
「お～可愛いやつだ」
俺はめろんを胸元に抱きかかえ、頭を撫でてやる。この感触が気持ちいいんだ。

《え、ペット⁉》
《空飛ぶトカゲ……？》
《かわいい！》
コメント欄もめろんの登場に沸き立つ。早速人気じゃないか。
でも、そうなると疑問は出てくるようで。
《それペットですか？　どう見ても魔物なんですが》
「はい、そうですね……ダンジョンなので。ここ」
《ええ⁉　ダンジョン⁉》
《自宅がってこと⁉》
《すげえ、そんなのあるんか！》
「はい実は、『自宅ダンジョン』ってやつです」
ダンジョンは自然発生的に出現するもので、未だ出現場所を予測する技術は無い。

そして、家の敷地内にできたダンジョンを『自宅ダンジョン』と呼ぶんだ。
この家はまさにそんな中の一つ。これは相当珍しい現象みたい。
「俺が探索者の資格を取ったのも、ここの家主になるためなんですよ」
この際だから全部話しておくか。
「元々ここはおじいちゃんちでしたが、色々あって俺が引き継ぐことになって。ダンジョンを保有する家の家主になるには、資格が必要だったんです」

《なるほど、ただ資格取っただけって感じなんだ》
《昇級の必要がないからFランクなのか》
《一つしか潜ったことないって、自宅ダンジョンのことだったか》
《じゃあご両親は？》

「両親もちょっと……まあ、はい」

《あ、聞いちゃいけなかったか》
《すみません》

若干しんみりするコメント欄を見て、俺は再度めろんの頭を撫でた。

「いやいや、気にしなくていいですよ！　だって――」
「キュイ？」
「俺には可愛いペットたちがいますからね！」
「キュイ～！」

《泣いた》
《たくましくてええ子やん》
《めろん、ホシ君を守ってあげてな》

「キュイッ！」
「なんか俺が守られる側になってません⁉」
めろんはすごく賢い。人の言葉を理解しているので、コメント欄の文字にも反応したのだろう。
その後も視聴者からの質問は続く。

《めろんちゃんが来た方向にダンジョンがあるんですか？》

「そうですね。あ、どうせなら行ってみます？」

《すっご、行きたい！》
《見せてくれ～！》
《自宅ダンジョンって初めて見る！》

「それじゃ、地下に行きますねー」
反応も上々だ。いきなり途方に暮れたけど、めろんが来てくれて助かったな。
なんて思いながら、俺は地下へと足を進める。構造で言えば、地上が俺んち、地下がダンジョンになっている。そうして、下に続く階段を下りて、地下一階の扉の前。
「ここを開けばダンジョンです！」

《普通の引き戸やんｗ》
《本当に家の中にあるんだ》
《あれ。ていうか、めろん外に出てきてない？》

「あ、そうなんですよー！」
どうやら普通の魔物は、ダンジョン外に出ることはできないらしい。だけど、うちのペットたちはそうではない。
「どうしてでしょうね……？」

《こっちが聞いたんだよｗｗｗ》
《いや知らないんかい！》
《いかにも知ってそうにしやがってｗ》
《皆さん聞く相手間違えてます》

あれ、まさか俺がアホキャラだと思われてないか？　いや、きっと気のせいだ。ここまでにボロを出した記憶が無い。
「それでは、気を取り直して行ってみましょー」
「キュイ～ッ！」
扉を開けてそこに浮かび上がった光景に、コメント欄は一斉に沸き上がった。

《ほあっ!?》
《なんじゃこれえええ！》
《すげえええ！》
《やっばｗｗｗ》
《ガチでダンジョンやん!!》
《これ自宅にあんの??》

視界一面に広がったのは大自然。地下一階は涼しい草原エリアだ。
なぜか上からは陽の光が降り注いでいて、頬に当たる風は気持ちがいい。草木は足元まで生い茂り、全体的に心地いい階層だ。
だけど、ここまで驚かれることに疑問を感じてしまう。
「そんなにすごいんですかね？」

《すごすぎるわｗｗｗ》
《どうなってんだこれ……》
《ダンジョンの中でもレベチじゃね？》
《きもちよさそ～》

「そうなんですね。まぁ、とにかく気持ちいいんですよ～。ほら、これとか」
止まらないコメントに驚きながらも、俺はその辺に流れる水に口を付ける。
青色に光る川の水だ。
「ぷはー、うまい！」

《なんか色、変じゃない？》

《青く光っているような》
《日向ヒカリ：ねえ、嘘でしょ……》

コメントには、アカウントの名前が付いている。今までは特に触れなかったけど、『日向ヒカリ』の名前には反応が多い。

《え、ひなたヒカリ⁉》
《おいまじかよ、本物だ！》
《すげえ大物だぞ！》
《こんな人も見に来てんのかよ‼》

「えっとー、日向ヒカリさん？　見に来てくださりありがとうございます。登録者は……１５０万人⁉」
アカウント名をタップすると、驚異の数字が出てきた。超大物の登場に俺は思わず目を見開く。
「どひゃー！」

《知らねえのかよ！》
《高校生で唯一のＳランク探索者だぞ！》

《今一番アツい》
《めっちゃ強い》
《あと可愛い（重要）》

どうやら彼女を知らない俺の方が珍しいらしい。でも、ヒカリさんは構わずコメントをくれる。

《日向ヒカリ：私のことはいいから。良かったら、その川を近くで映してくれないかしら》

「は、はい。こうですか？」

《日向ヒカリ：信じられない。本当に『魔素水』が流れてる》

「え、魔素水？　なんですかそれは」

《はい⁉　魔素水⁉》
《ガチで言ってんのかよ⁉》
《うっそだろｗｗｗ》
《ヒカリちゃんが言うなら本当だわ》

「ど、どういうことですか？　魔素なら知ってますけど……」

魔素はダンジョン内に漂う物質のこと。ダンジョン限定の酸素のようなものだ。

これを吸って魔物は成長し、探索者はダンジョン内で人外の動きが可能になる。俺がワイバーンを倒せたのも、この魔素のおかげだ。

《日向ヒカリ：魔素水は、魔素を多く含んだ水よ。液体化している分、吸収効率がすごくいいの》

「てことは、それを飲むとどうなるんですか？」

《日向ヒカリ：様々な作用はあるけど、一言で言えば「強くなる」わね》

「へー」

なんだかそれぐらいしか言うことがない。昔からこの辺にずっと流れてるし。なんなら、この家では飲用水や庭の畑もこの水を使っている。

《日向ヒカリ：魔素水なんて、深層の奥深くでコップ一杯分取れれば奇跡ぐらいの超希少アイテムよ》

「ほーん。世の中、不思議なこともあるものですね」
《感想が軽いんだよなあｗｗ》
《へー、ほーんで草》
《もっと驚けｗｗ》

もちろん驚いてはいる。でも、どちらかと言えば納得に近い。
俺はうんうんとうなずきながら、隣のめろんを見上げた。
「だから、めろんもこうなるんですね～」

《ファッ⁉》
《なんじゃこりゃーーー‼》

「ギャウッ！」
俺の視線に合わせてカメラが上を向くと、巨大化しためろんが映った。
緑のもふもふな毛並みは残しつつ、所々に筋肉が浮き出ている。翼はバサッとたくましい音を鳴らし、伸びた尻尾で存在感が大きく増していた。

立ち読みサンプル
はここまで

可愛らしい小さな姿からは一転。かっこよさが印象的なめろんが佇んでいる。
「ははっ、興奮したんだな」
「ギャウ！」
めろんは地下のダンジョン内で興奮すると、この姿になるんだよね。
「この姿も可愛いけどね～」
「ギャウ～ン」
大きくなった頭を抱えて、なでなでする。どんな姿でも可愛いものは可愛い。人懐っこい性格は変わらないからね。
だけど、ふと見たコメント欄はとんでもないことになっていた。
「え？」

《おいおいちょっと待て！》
《この姿、絶対そうだよな？》
《本物か⁉》

「皆さん？　どうしたっていうんですか」
視聴者が共通認識を持っているみたいだ。すると、確信を持ったのか、またもヒカリさんが答えてくれた。